

## 可視近赤外及びSAR画像を用いた南極しらせ氷河の流動解析

## Velocity Observation of Shirase Glacier in Antarctica

# 北山 智暁 [1]; 中村 和樹 [2]; 西尾 文彦 [3]

# Tomoaki Kitayama[1]; Kazuki Nakamura[2]; Fumihiko Nishio[3]

[1] 千葉大・理・地球科学; [2] 極地研・地学; [3] 千葉大・環境リモートセンシングセンター

[1] Earth Science, Chiba Univ; [2] Geoscience, NIPR; [3] Center for Environ. Remote Sens., Chiba Univ. Natural Sci., Chiba Univ.

南極しらせ氷河は昭和基地の南西 100km ほどのところに位置し、みずほ高原の主要部を流域とし、リュツォ・ホルム湾最南部に流出する氷流である (Fig1)。しらせ氷河の末端部は浮氷舌となっており、これまでの研究で浮氷舌とリュツォ・ホルム湾の海水変動には関係があることが報告されている。そして氷河末端部は氷床から海洋への淡水の供給源となり、流速が速い氷河において流速の増加は流入量の増加をもたらす可能性があり、南極の質量収支を考える上で南極沿岸の氷河の挙動をモニタリングすることは大変重要である。よって、本研究では詳細なしらせ氷河の挙動を把握するため、特に末端部の流速に着目し複数の衛星データをあわせて用いることで、浮氷舌における 1990 年から 2002 年の長期にわたる経年流速を算出した。しらせ氷河においてこれだけ長期にわたる流速を推定した事例はない。